The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 貨幣形態の謎 : 『資本論』における価値形態論をめぐって |
| Author(s) | 甲田, 純生 |
| Citation | メタフュシカ. 2000, 31, p. 29-41 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/66630 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 貨幣形態の謎

## ――『資本論』における価値形態論をめぐって――

甲田純生

「流行」という言葉はいかにも軽薄な言葉である。そしてこの言葉のもつ軽薄な響きは、「思想」という、暗く重い響きをもった言葉とは相入れないかのように見える。しかし「思想」も「流行」する。多くの思想が時代の流れにのって流行した。「思想」の「流行」は「思想」の腐敗過程でもある。流行の果てに廃れていった思想もあまたである。しかしながら、流行の果てにおいてもなお朽ちることのない思想は「真の思想」であり、それは「伝統」という牙城へと殿堂入りを果たすこととなる。

かつての（そして今もなお世界の一地域では）マルクス主義思想は、「流行」という言葉でとらえられるような、生易しいものではなかった。それは「主義」、イズムであり、闘争の精神であったからだ。しかし日本では、このマルクス主義思想も80年代にはいると、「イズム」から「流行」へと変わる。この流行のなかで、はたしてマルクスは真に理解されているのであろうか。マルクスを、イズムでもなく流行でもなく、一つの理論として継承するためには、我々はまずマルクスのテクストそのものに帰らなければならない。

### 一　なぜ「商品論」を読むのか

我々がここで扱うテクストは、『資本論』の第一篇、商品論である。マルクスは資本主義の分析を、商品の分析から始めた。近代資本主義を解明するためには、まず「資本」を概念的に把握しなければならない。資本は貨幣の集積であり、資本主義社会においては貨幣は資本へと転化する。しかるに資本へと転化する運命にあるこの「貨幣」の生成が解かれなければならない。かくしてマルクスは、貨幣生成の論理的必然性を示すために、商品の分析をもって『資本論』を始めたのである。商品論は、したがって、「資本」を解明するための鍵であり、『資本論』全

体の理解のための要となる。これが、我々が商品論を扱う第一の理由である。

第二の理由は、マルクス自身が述べているように、『資本論』のこの箇所が、『資本論』において最も難解である、ということである。『資本論』の第一版の序文において、マルクスは次のように述べている。「なにごとも初めが困難だということは、どの科学の場合にも言えることである。それゆえ、第一章、ことに商品の分析を含む節の理解は、最大の困難となるであろう。…価値形態に関する一節を別とすれば、本書を難解だと言って非難することはできないであろう」（十一、十二）[1]。そもそもマルクスが商品の分析を行ったのは、商品から貨幣形態が生成する論理的必然性を示すためであった。この生成の論理は、ここでマルクスが「価値形態に関する一節」と呼んでいる箇所に該当する。したがって価値形態論が商品論の中核をなす論理なのであり、また当然のことながら、我々の中心テーマともなる。そしてこの価値形態論は、マルクス自身が認めた「顕微鏡的詮索」の難しさゆえに、多くの誤解と無理解にさらされることになる。ここに、我々がマルクス「商品論」を扱う第三の理由がある。たとえば栗本慎一郎氏は、その著書『幻想としての経済』のなかで、次のようなマルクス批判を行っている。「…貨幣とは、交換の中から生まれるようなものであるわけはない。ただ、ものの見えない学者にそう見えただけである。マルクスの最大の欠陥はそこにあった。彼の貨幣論、価値形態論は、ただただ十九世紀的誤りのまとめにすぎない。けれども、価値形態論には、何人かの人々がまだ食らいついているだけあって、貨幣が深層からの聖体示現物であることに気が付いている彼の「悩み」が見られる。物神性論は、そのポイントであるが、しかし、もういい加減にマルクスを手がかりにするのはやめたらどうだろう」[2]。栗本氏の立論はこうである。《過剰》の蕩尽を一時にまとめて味わうという人間的エロティシズムこそが、人間の経済活動の基軸である、というのが経済人類学の基本的スタンスである。そしてこの見地からすれば、交換というのはそもそも、物質的な理由で始められたのではなく、生産と同じく、消費と破壊という祝祭的時空での行為をめざして行われるものである。そしてその交換の原型となるのが、ポトラッチに代表されるような一方的贈与である。そしてこの贈与関係において、贈与の受容者が贈与物に存在する霊魂に基づく有責の観念を払いのけるために、「等価」として贈与者に渡したものが「貨幣」である。したがって貨幣とは聖体示現してきた一つの力のシンボルであり、いわゆる支払い手段としての貨幣は、このような貨幣の本質から発したものにすぎない。貨幣の本質を以上のように規定したうえで、栗本氏は次のように断言する。「サドやバタイユのような文学者〈そして遠くヘスのような初期唯物論者の一部延長線〉以外に誰が、貨幣とエロスの通底に気付いた

のだろう」[3]。栗本氏のマルクス批判にもかかわらず、以上のような栗本氏の貨幣論とマルクスの価値形態論とはなんの関係もない。両者のあいだのすれちがいの原因は、栗本氏が「価値形態論」を「貨幣の発生論」と勘違いしていることにある。本論稿の最後で明らかにすることになるが、マルクスの「価値形態論」とは、「貨幣の発生論」などではなく、貨幣生成の論理、厳密に言えば「貨幣形態の生成の論理」なのである。「価値形態論」を「貨幣の発生論」ととらえたとたんに、我々はマルクスの真意から遠く離れてしまうのである。マルクスにとって「貨幣の謎」とは、栗本氏の言うような貨幣の秘密＝貨幣のエロス性ではなく、一商品が「他の商品が全面的に自分の価値をこの一商品で表すのではじめて貨幣になるとは見えないで、逆に、この一商品が貨幣であるから、他の諸商品が一般的に自分たちの価値をこの一商品で表すように見える」（一〇七）という、重金主義や重商主義に代表されるような錯誤のことなのである。

マルクス「価値形態論」の誤解もしくは無理解をもたらす原因は、大きく二つに分けられる。第一は、栗本氏に代表されるように、「価値形態論」を「貨幣の発生論」ととらえてしまうことである。第二は、「価値形態論」のなかに「交換過程論」を読みこんでしまうこと、あるいは「価値形態論」と「交換過程論」とを混同してしまうことである。第一の原因も第二の原因も、『資本論』を読む際に大きな誘惑となって我々の前に立ちはだかる。この誘惑に負けてしまうのは、マルクスの言うように「抽象」能力の欠如によるのだが、特に第二の誘惑はよほど大きなものらしい。「価値形態論と交換過程論を混同してはならない」と声高に言う論者の中にすら、いつのまにか「価値形態論」を解釈しながらこっそり「交換過程論」を忍びこませているものが多いのである。我々はこのような過ちを繰り返さぬようにしなければならない。

## 二　『経済学批判』と『資本論』における記述の相違

「価値形態論」をマルクスは何度も書き直している[4]。おそらくは、価値形態論の真意を読者に伝えることがよほど困難であることを、マルクス自身が自覚していたからにちがいない。ここでは一八五九年に出版された『経済学批判』と、その続編として刊行された『資本論』第二版（一八七二年）における記述を比較しておきたい。まず、両者の違いについて、マルクス自身は『資本論』第一版の序文において次のように述べている。「まえのほうの著書〔『経済学批判』〕の内容は、この第一巻の第一章[5]に要約してある。そうしたのは、ただ関連をつけ完全にするためだけではない。叙述が改善されている。以前にはた

だ暗示されただけの多くの点が、ここでは、事情の許すかぎり、さらに進んで展開されており、また反対に、あちらでは詳しく展開されていることが、こちらではただ暗示されるにとどまっている」（十一）。マルクスは「要約」と言っているが、『資本論』の記述は「要約」などといった代物ではない。

ちなみに、『経済学批判』の目次と、『資本論』において『経済学批判』の内容に該当する箇所の目次とを比較してみると、一見して明らかなのは次の三点である。①商品および貨幣についての諸理論に関する考察が『資本論』では削除されていること、②「商品」と題された第一章の内容が、『資本論』ではさらに細かい節に細分化されていること、また「価値形態」に関する節が独立に設けられ、記述が詳細になっていること、③「交換過程」に関しては、独立した章が与えられ、「価値形態論」と「交換過程論」とが明確に分けて論じられていること。第一点は本質的な問題ではない。また第三章（『経済学批判』では第二章）の構成に関しては、『経済学批判』と大きく変わることはない。「価値形態」に関する記述が大幅に改められていること、「交換過程論」が「商品論」から外されていること、これが重要な点である。単純に量的な面からいっても、『経済学批判』で商品の分析に当てられている（第一章、ただし「A商品の分析の史的考察」は除く）のは、ディーツ版で二十三ページ、『資本論』でこの二十三ページに相当する内容は六十ページ。『資本論』での記述は、『経済学批判』の三倍近くになる。「価値形態論」に関して言えば、『経済学批判』においてそれに相当する箇所は三ページ分程の量しかない。この三ページが『資本論』においては二十四ページにもわたって展開されているのである。

内容の面から両者を比較すると、①『経済学批判』の記述は、明らかに「価値形態論」よりも「交換過程論」に重きが置かれている。ここではマルクスは、現実の交換過程における矛盾から「貨幣」を導出しようとやっきになっているように見える。②「価値形態論」に関しては、『経済学批判』では十分に展開されているとはいいがたい。『経済学批判』においては商品分析の視点が不明確であり、「価値形態論」が「商品と商品の関係論」に終始しているかのような印象を与える。

①と②をふまえるならば、『経済学批判』においては、マルクスはまだ「価値形態論」をその本来の論理において独立してとらえられていなかった、と言いうるかもしれない。「価値形態論」という抽象、顕微鏡的詮索は、マルクスその人においても、けっして容易なものではなかったのかもしれない。以下我々は、『資本論』の記述にもとづき、実際に「価値形態論」に迫ることにしよう。

マルクスは『資本論』のなかで、「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」についての記述を始めるにあたって、次

のように述べている。「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある」(六三)。したがって我々は単純な価値形態の分析に全力を注がなければならないが、その前に、価値形態の分析にいたるまでの商品分析の記述をざっと追跡しておく。

## 三　価値の実体

『資本論』第一篇冒頭の商品論は、一商品を分析することで、そこに含まれている価値の実体を確定することから始められる。まずは古典派経済学の遺産にのっとり、商品価値が使用価値と交換価値という二つの要因によって形成されていることが確認される。

商品は人間の欲望の対象となるものである、いいかえれば商品は使用価値をもつ。しかし使用価値をもった物財が「商品」となるのは、生産物が「交換」を前提にして作られる場合に限られる。すなわち商品は使用価値だけでなく、交換価値をもたなければならない。「交換価値は、まず第一に、ある一種類の使用価値が他の種類の使用価値と交換される量的関係、すなわち割合として現れる」(五〇)。一商品の交換価値は、使用価値とは違い、その商品をいくら観察してみても見えてはこない。一商品の交換価値は、他の商品との等価関係のなかにしか現れてこないからである。ある商品Aが別の商品Bと等価関係に置かれる。「x量の商品A＝y量の商品B」。この場合、商品Aと商品Bとはそれぞれ異なった使用価値をもっていなければならない。同じ使用価値をもった物財は交換されないからである。とすれば、先の等式においては質的に異なったものが等置されているということになる。質的に異なったものが一定の量的関係において等置されうるのは、両者に「同じ大きさの一つの共通物」が含まれているからに他ならない。この共通物は、商品の使用価値ではありえないから、商品から使用価値という側面を捨象してみる。すると「商品体に残るものは、ただ労働生産物という属性だけである」(五二)。かくして「共通物」が人間労働であることが判明する。しかしながら「共通物」たるこの人間労働は、質的に異なる二つの商品を量的関係において等置しうるようなものでなければならないから、商品から使用価値が捨象されたのと同様に、人間労働からもその質的側面、商品の使用価値へと結晶するような面が捨象されなければならない。こうして二商品の「共通物」たる人間労働は、量的規定のみを備えた「抽象的人間労働」へと還元される。抽象的人間労働の量的規定は「労働時間」である。とはいっても、ここでいう「労働時間」とは、個人の能力や熟練の度合いによって変化しうるような労働時間ではなく、「現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、な

んらかの使用価値を生産するために必要な労働時間である」（五三）。したがって「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない」（五四）。こうして、交換価値として現れる「商品の価値」の実体が人間労働であり、その価値の量的定在が労働時間であることが、商品の分析によって示されたのである。

## 四　マルクスによる「価値形態論」の記述

商品が使用価値および交換価値という二面性をもっているのに対応して、商品に対象化される労働も、具体的有用労働および抽象的人間労働として二面的にとらえられた。商品のうちに含まれる価値の実体は、一商品を考察することで解明することができた。しかしながら「商品の価値対象性は…商品と商品との社会的な関係のうちにしか現われえない」（六一）。したがって今度は商品を価値関係において考察しなければならない。

もっとも単純な価値関係は、異種の二つの商品の関係である。「それゆえ、二つの商品の価値関係は、一商品のためのもっとも単純な価値表現を与えるのである」（六二）。我々が考察すべき価値表現は

〔価値の第Ⅰ形態〕

x量の商品A＝y量の商品B
（20エレのリンネル＝1着の上着）

である。この等式において、商品Bは商品Aの価値を表現している。したがって商品Bは「等価形態」にあるといわれる。それに対して、商品Aは商品Bによって価値を表現されている。しかしながら商品Aの価値は商品B以外のほかの商品によって表現されることもでき、その場合は、商品Aの価値は、商品Bで表される場合とは量的に異なった割合で表現されることになるから、商品Aの価値は商品Bによっては相対的に表現されているにすぎない。したがって先の等式において、商品Aは「相対的価値形態」にあるといわれる。

しかしながらこの単純な価値形態は「商品Aをそれ自身とは違った何らかの一つの商品種類に対する交換関係のなかにおくだけであって、ほかのすべての商品との商品Aの質的な同等性と量的な割合とを表すものではない」（七六）から、価値表現として不十分である。したがってこの単純な「個別的な価値形態」はおのずからもっと完全な形態に移行する。かくして「全体的な、または展開された価値形態」が得られる。

〔価値の第Ⅱ形態〕

一着の上着（u量の商品B）
20エレのリンネル＝10ポンドの茶（v量の商品C）
（z量の商品A）　40ポンドのコーヒー（w量の商品D）
1クォーターの小麦（x量の商品E）
…

ここでは商品Aは、すべてのほかの商品と関連をもつ。商品A

の価値は、等価物の位置に立つ他の商品の無限の系列によって表現されている。しかしながら「それぞれの商品の相対的価値が…この展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限の価値表現列である」（七八）。要するに20エレのリンネルの価値を表現するためには上の等式の系列を無限に続けていけばよいが、他の商品、例えば1ポンドの茶の価値を表現するためには、上の等式とは全く異なった量的比率をもつ別の等式の系列（しかも上の等式と同様、この系列も無限に続く）が必要となり、結局のところ商品の種類と同じ数だけの「相対的価値形態の系列」が必要となってしまう。この困難を解決するためには、上の等式を逆にしさえすればよい。すなわち、

一着の上着（u量の商品B）
10ポンドの茶（v量の商品C）＝20エレのリンネル　〔価値の第Ⅲ形態〕
40ポンドのコーヒー（w量の商品D）　（z量の商品A）
1クォーターの小麦（x量の商品E）
…

「新たに得られた形態は、商品世界の価値を、商品世界から分離された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表す。リンネルと等しいものとして、どの商品の価値も、いまではその商品自身の使用価値から区別されるだけでなく、いっさいの使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されるのである。それだからこそ、この形態がはじめて現実に諸商品を互いに価値として関係させるのであり、言い換えれば諸商品を互いに交換価値として現れさせるのである」（八十）。ここにおいて、商品世界から排除された一商品（リンネル）以外のすべての商品は、価値の一般的表現を獲得する、すなわち一般的相対的価値形態を得る。それに対して排除された一商品であるリンネルは、その身でもって他のすべての商品の共通の尺度として、すなわち一般的等価形態として機能する。一般的等価形態として商品世界から排除される商品が、一つの独自な商品種類、すなわち「金」に限定されると、貨幣形態が得られる。この瞬間から「はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをかちえたのである」（八三）。

一着の上着（u量の商品B）
10ポンドの茶（v量の商品C）＝2オンスの金　〔価値の第Ⅳ形態
40ポンドのコーヒー（w量の商品D）　（z量の金）　＝貨幣形態〕
1クォーターの小麦（x量の商品E）
…

以上が、『資本論』における「価値形態論」の概要である。

## 五　「価値形態論」における諸問題

まず「価値形態論」における問題点をいくつか整理しておこう。

①「価値形態論」では、単純な価値形態（第Ⅰ形態）にはじまって貨幣形態（第Ⅳ形態）にいたるまでの移行が語られている。たとえば第Ⅰ形態から第Ⅱ形態への移行においては、第Ⅰ形態が商品Ａの価値表現として不十分であるため必然的に第Ⅱ形態へと移行する、というように「移行」の必然性が語られているが、この「移行」の必然性がかならずしも明確ではない。特に多くの読者を驚かせ困惑させるのは、第Ⅱ形態から第Ⅲ形態への移行である。ここでマルクスは第Ⅱ形態の等式を単純にひっくり返すのである。ヘーゲルの論理学を彷彿とさせるような無造作な移行は、「価値形態論」の存在意味そのものを我々にわかりにくくしている。

②すでに指摘したように、「価値形態論」は貨幣の発生論ではなく、「貨幣形態の生成」の論理である。マルクス自身、「価値形態論」をはじめるにあたって次のように述べている。「いまここでなされなければならないことは、…貨幣形態の生成を示すことであり、したがって諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な目だたない姿から光まばゆい貨幣形態にいたるまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである」（六二）。では「貨幣形態の生成」とはなにのか。

③②の問題は、「価値形態論」と「交換過程論」の区別という問題とも関連している。「交換過程論」で説かれているのは、商品所持者と商品所持者の間での商品の具体的な交換のプロセスにおいてどのような困難が生じるのか、といった問題であり、それと関連して貨幣の歴史的な発生の問題にも簡単に触れられている。ようするに、「交換過程論」にいたってはじめて、「商品所持者」という「人間」が登場するのである。価値実体の分析においても、価値形態論においても、「商品所持者」としての人間は不在のままである。「価値形態論」と「交換過程論」の区別という問題は、「貨幣形態生成の論理」としての「価値形態論」とは何かという問題をいっそうきわだたせる。

## 六　「価値形態論」の検討

マルクスが心血を注いだ「価値形態論」とは、一体何なのか。この問いに対して、「マルクスにおいては「価値形態論」はまだ完成していない」というユニークな視点から、マルクス「価値形態論」の新しい読解を提示しているのが、岩井克人氏の『貨幣論』[6]である。岩井氏は、その著書において「価値形態論の構造自体が、みずからの完成を拒み、みずからに無限のくりかえしを強いる」[7]と言う。そうしてマルクスの「価値形態論」

の改変を強行する。岩井氏によれば、価値の第Ⅱ形態と第Ⅲ形態とは循環関係にある。なぜならば、第Ⅱ形態において相対的価値形態の位置にあるリンネルが他のすべての商品に直接的交換可能性を与えている（＝他のすべての商品に等価形態を与えている）のであれば、逆に他のすべての商品はリンネルに直接的交換可能性を与えることができ（＝他のすべての商品はリンネルを等価形態に置くことができ）るからである。すなわち、リンネルは全体的な相対的価値形態であると同時に一般的等価形態でもある、というのである。そして、このように、全体的な相対的価値形態と一般的等価形態とを同時に演じる存在が、岩井氏の言う「貨幣」なのである。すなわち、マルクスが行ったように第Ⅲ形態から第Ⅳ形態へと移行することで価値形態が完成するのではなく、第Ⅱ形態と第Ⅲ形態が循環する無限の運動のなかにこそ「貨幣」が存在する、というのが岩井氏の主張である。こうして第Ⅱ形態と第Ⅲ形態とをはりあわせて循環させた「貨幣形態Z」なるものが提出される。そうして岩井氏は言う。「貨幣の場合には、それが貨幣として流通しているかぎり永久に商品世界の内部にとどまり、商品と商品とのあいだの交換を媒介しつづける。…じっさい…我々の貨幣形態Zにおいては、貨幣はその循環論法を現実として生きる存在として、その生産のための人間労働をはじめとする外部的な根拠をいっさい必要としていないのである」[8]。この岩井氏の発言から、岩井氏の「貨幣形態Z」なるものが、貨幣の流通の論理であることが明らかとなる。つまり、「価値形態Ⅱと価値形態Ⅲの循環」が意味していたものは、現実の市場における貨幣の流通過程だったのである。また岩井氏は次のようにも言う。「貨幣が貨幣であるのは、それが貨幣であるからなのである。…貨幣という存在は、貨幣形態Zのなかで貨幣の位置を占めつづけていることさえできれば、それ自体が実体的な価値をもつ商品である必要はいっさいない」[9]。「貨幣という存在は、みずから の存在の根拠をみずからでつくりだしている存在である。それは、全体的な価値形態B〔本論稿での「価値形態Ⅲ」〕とのあいだの無限の循環論法によって、宙づり的に支えられているにすぎない」[10]。岩井氏が読解した「価値形態論」が貨幣の流通の論理であることによって、価値形態論は「貨幣形態の論理」であることをやめる。ここで岩井氏によって展開されているのは、貨幣形態に関する議論ではなく、貨幣、しかも今日の我々にとってもっとも馴染みのある「不換紙幣」に関する議論である。金と交換可能な兌換紙幣と異なり、不換紙幣は商品流通の内部で無限に循環し続けることでその存在意義と存在根拠を獲得するような存在であることはまぎれもない事実である。そして不換紙幣の生成の論理としては、岩井氏の貨幣形態Zは正しい。しかしながら、問題はマルクスの「価値形態論」がそのようなものであるのかど

うか、である。

岩井氏において、なぜこのような読みかえが生じたのか。原因は、岩井氏の次のような発言にはっきりと現れている。「価値形態論で論じられるのは、与えられた商品世界のなかで、価値のにない手としての商品がおたがいにどのような関係をもたなければならないかという問題である」[11]。岩井氏は「価値形態論」を最初から商品関係論へと読みかえているのである。ここに、マルクス「価値形態論」を読む際の、もっとも微妙かつ重大な問題が隠れている。結論からいえば、マルクスの「価値形態論」は二商品をもってきてはいても、あくまでも一商品を分析するための論理なのである。それは、『資本論』におけるマルクスの次のような表現においてほのめかされている。「二つの商品の価値関係は、一商品のためのもっとも単純な価値表現を与えるのである」（六二）。「一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちにどのようにひそんでいるかを見つけだすためには…」（六四）。マルクスが価値形態を分析するとき、分析の視点は商品Aに置かれている。問題は、そのことがマルクスのテキストにおいて明確ではなく、価値形態論の論理の本質が、商品と商品の関係にあるように見えてしまうということなのである。岩井氏の著作は、「価値形態論」を商品関係論とみた場合に、マルクス読解がたどる道筋を典型的に示している。しかしながら、価値形態論を商品関係論だと解釈した場合、本論稿の第五節で指摘したような、価値形態論における諸問題は、いっこうに解決されないばかりか、不問に付されてしまうのである。

では、価値形態論におけるマルクスの真意はどこにあるのか。それは貨幣形態が生成する論理的必然性を示すことである。その必然性はどこにあるのか？「商品」概念そのものに、である。商品概念のうちに、貨幣形態を成立せしむる必然的契機が胚胎していることを示すことこそ、「価値形態論」の課題なのである。だからこそマルクスは「困難は、貨幣が商品だということを理解することにあるのではなく、どのようにして、なぜ、なにによって、商品は貨幣であるのかを理解することにあるのである」（一〇七）（傍線筆者）と述べているのである。そして一商品に内在している矛盾（ヘーゲル的な意味での）を展開し、貨幣形態にいたるまでを追跡したのが、価値形態論における論理展開であり、価値形態ⅠからⅣへの移行の意味である。

先に見たように、労働生産物は使用価値をもつだけでは商品ではない。それは交換されなければならない。「商品」が交換されるためには、その商品がどれほどの価値（使用価値ではない）をもっているのかをみずから示さなければならない。したがって商品の価値表現は、商品が商品であるためには、必然的に要求される。しかしながら、一商品の価値は他の商品との等

価関係においてしか表現されえないのであった。商品のもっとも単純な価値表現である「単純な価値形態」をもう一度見てみよう。

x量の商品A＝y量の商品B（20エレのリンネル＝1着の上着）

分析の視点は商品Aに置かれている。商品Aの価値を表現するには、いかなる方途があるのか、これが課題であって、等式を逆にして商品Bの価値を表現することはここでは考えられていない。一商品（商品A）に分析の視点が置かれているのは、諸商品の関係を分析することが価値形態論の目的なのではなく（「交換過程論」との違いもここにある。「交換過程論」こそ、まさしく商品関係の考察なのである）、商品概念に内在する矛盾を展開することが目的だからである。

したがって誤解してはならないことは、この等式が「物々交換（直接的生産物交換）」を意味しているのではない、ということである。「物々交換」については『資本論』においては「交換過程論」で論じられている。そこでマルクスははっきりと、物々交換における物財は使用対象にすぎないのであってまだ「商品」ではない、と言っている。なぜなら物々交換における交換はまだ偶然的なものであって、物財と物財が交換される量的比率も偶然的要因にゆだねられているからである。そこでは、人間の労働は、まだ抽象的人間労働へと還元されえるほど社会が成熟していないのである。

商品Aの価値表現としての「単純な価値形態」における要諦は、「一商品の価値が他の商品の使用価値で表される」（六六）ということにある。マルクスは同じことを「商品Bの現物形態は商品Aの価値形態となる」（六七）とか、「商品Bの身体は商品Aの価値鏡になる」（六七）といった様々な表現でいいかえている。このことを説明するために、マルクスは、棒砂糖の重量を鉄で量るという例を比喩としてもちだしている。棒砂糖それ自体をいくら眺めても、その重量はわからない〔商品Aそのものをいくら眺めても、その価値はわからない〕。棒砂糖の重さを知るために〔商品Aの価値を表現するためには〕、我々はそれを鉄との重量関係におく〔我々はそれを商品Bとの価値関係におく〕。「この関係のなかでは、鉄は、重さ以外のなにものをも表していない物体と見なされるのである。それゆえ、種々の鉄量は、砂糖の重量尺度として役だち、砂糖体に対して単なる重さの姿、重さの現象形態を代表するのである」（七一）〔この価値関係のなかでは、商品Bは「価値」を表す物体と見なされる。それゆえ商品Bは商品Aの価値尺度として役だち、商品Aに対して「価値」の現象形態を代表する〕。ようするに、棒砂糖との重量関係において鉄がそのままの姿で両者に共通の「重さ」を体現していたように、等価形態の位置に置かれる商品Bが、商品Aの価値表現においては、そのままの姿で商品A

と商品Bに共通する「価値」を体現するのである。重量関係においては、鉄が代表する「重さ」は鉄の属性でもある。しかし商品間の価値関係において表現される「価値」は、本来は商品Bの属性ではない。商品に内在する「価値」は、抽象的人間労働の対象化したものである。ここでは商品は逆立ちしている。「リンゴやナシは果物である」という言説は一般常識である。この言説においては「果物」はリンゴやナシといった具体的個物から抽象された一般的概念である。しかしもし「リンゴやナシは果物の現象形態である」というならば、それは形而上学的言説であろう。ここでは抽象概念が事物の本質となっている。このような逆立ちが、商品存在の場合には真実なのである。抽象的実体である「価値」が、等価形態において具体的な形をとって現れる。すなわち等価形態においては「価値」が商品体そのものに付着しているかのように、「価値」が商品Bの属性であるかのように現れる。いいかえれば、商品Aの価値表現は、商品体Bに「価値」という属性を押し付けるのである。商品Aの価値表現においては、商品Bは生まれながらにして価値の尺度であるように見える。このような押し付けはそもそも、商品が使用価値と価値という対立する二面をもつ、という商品の概念そのものに原因がある。棒砂糖の重量を量ることは棒砂糖にとってなんら必然的なことではない。しかし商品Aがその価値を表現することは商品Aにとって必然である。なぜなら等価物として交換されうるということが、商品が商品たるゆえんだからである。つまり商品そのもののなかに「等価形態」という価値形態を成立させる要因があったのである。そしてこの等価形態の完成形こそが「貨幣形態」に他ならない。

こうして貨幣形態の謎も消える。貨幣形態の謎とは、「一商品は、他の商品が全面的に自分の価値をこの一商品で表すのではじめて貨幣になるとは見えないで、逆に、この一商品が貨幣であるから、他の諸商品が一般的に自分たちの価値をこの一商品で表すように見える」（一〇七）ということであった。このような逆転は、すでに「単純な価値形態」における「等価形態」においてみられた。それゆえマルクスは、貨幣形態の謎が「単純な価値形態」にひそんでいると力説したのである。

**注**

（1）Marx. K.: *Das Kapital*, Dietz Verlag Berlin, 1982.以下『資本論』からの引用はすべて、本文中にページ数のみを記す。

（2）栗本慎一郎著『幻想としての経済』（青土社、一九八〇年）二七ページ。

（3）栗本、前掲書、五七ページ。

（4）マルクスによる「価値形態論」の変遷を追ってみると、①『経済学批判要綱』（一八五七～一八五八年）⬇②『経済学批判』（一八五九年）⬇③初版本『資本論』（一八六七年）⬇④『資本論』第二版（一八七二年）。

（5）マルクスがここで言っているのは、『資本論』第一版（一八六七年）の第一章のことである。マルクスは第二版以降『資本論』の構成を変えたため、ここで言われている「第一章」とは、今日我々が手に

する現行版『資本論』の「第一篇」にあたる。

(6) 岩井克人著『貨幣論』(筑摩書房、一九九三年)。

(7) 岩井、前掲書、一〇ページ。

(8) 岩井、前掲書、五八～五九ページ。

(9) 岩井、前掲書、六四ページ。

(10) 岩井、前掲書、九七ページ。

(11) 岩井、前掲書、二五～二六ページ。

(こうだすみお　大阪外国語大学非常勤講師)